

平成31年度
劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
成果報告書

団 体 名	公益財団法人 横浜市芸術文化振興財団	
施 設 名	横浜能楽堂	
助 成 対 象 活 動 名	公演事業・普及啓発事業	
内定額(総額)	20,275	(千円)
公 演 事 業	13,896	(千円)
人 材 養 成 事 業	0	(千円)
普 及 啓 発 事 業	6,379	(千円)

1. 事業概要

(1) 平成31年度実施事業一覧【公演事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	企画公演 「史上空前の狂言会-30人超 VS たった1人」	4月27日(土)	狂言「独り松茸」茂山あきら 狂言「唐相撲」茂山千作	目標値	314
		横浜能楽堂 本舞台		実績値	477
2	企画公演 「東次郎 家伝十二番」	4月20日(土) ~3月1日(日)	「翁」山井綱雄、山本東次郎 ほか全12公演(内1回中止)	目標値	2,198
		横浜能楽堂 本舞台		実績値	4,668
3	特別企画公演 「大典 奉祝の芸能」	6月2日(日)、 7月20日(土)	琉球舞踊「歌声の響」志田房子 能「大典」片山九郎右衛門ほか	目標値	630
		横浜能楽堂 本舞台		実績値	880
4	特別公演-蠟燭能-	10月14日(月・祝)	狂言「空腕」野村萬 能「姨捨」浅見真州	目標値	314
		横浜能楽堂 本舞台		実績値	455
5	横浜能楽堂・神奈川県立歴史博物館提携企画公演 「井伊直弼が作った能と狂言」	2月29日(土)	狂言「鬼ヶ宿」茂山千五郎 能「筑摩江」出雲康雅 (公演中止)	目標値	312
		横浜能楽堂 本舞台		実績値	0
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	

(3) 平成31年度実施事業一覧【普及啓発事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	第67回横浜能	6月29日(土)	狂言「箕被」野村万作 能「隅田川」豊嶋彌左衛門	目標値	315
		横浜能楽堂 本舞台		実績値	453
2	横浜能楽堂 次世代育成プロジェクト	7月14日(日) ～3月22日(日)	「こども狂言ワークショップ」「こども狂言堂」など次代を担う子供たちに古典芸能に触れてもらう事業	目標値	551
		横浜能楽堂 ほか		実績値	986
3	横浜能楽堂普及公演 「眠くならずに楽しめる能の名曲」	12月22日(日)	トーク 中村雅之 狂言「業平餅」井上松次郎 能「羽衣」和久荘太郎	目標値	315
		横浜能楽堂 本舞台		実績値	418
4	普及公演 「バリアフリー能」	3月20日(金・祝)	解説 井上貴覚 狂言「清水」井上松次郎 能「橋弁慶」高橋忍(公演中止)	目標値	315
		横浜能楽堂 本舞台		実績値	0
5	横浜能楽堂 来館促進プロジェクト	4月11日(木) ～3月28日(土)	「施設見学会」「伝統文化一日体験オープンデー」など、日頃来館する機会のない層へアプローチを図る事業	目標値	1,500
		横浜能楽堂		実績値	2,066
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価
<p>社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。</p> <p>横浜能楽堂を所有する横浜市は「文化芸術創造都市」として4つの基本方針を挙げています。 【参考】 横浜市文化芸術創造都市施策の基本的な考え方 http://www.city.yokohama.lg.jp/bunka/outline/kangaekata/kangaekata.pdf</p> <p>また、横浜市は横浜能楽堂に求める役割として5つの柱を挙げています。 【参考】 横浜市能楽堂（横浜能楽堂）指定管理者業務の基準 https://www.city.yokohama.lg.jp/business/kyoso/public-facility/kaku-katsuyou/bunka/senteihyoka/nougakusentei/nougaku.files/0016_20180926.pdf</p> <p>横浜能楽堂では、これらを念頭に「古典芸能で自国の伝統に誇りを持つ 現代に生きる力をはぐくむ」というミッションを掲げています。そのミッションを達成するため、市民に横浜能楽堂および古典芸能に親んでもらうための活動、また市内に止まらず国内外に横浜能楽堂の魅力を発信していけるようなユニークな活動を行っています。</p> <p>平成31年度は、横浜市の有形文化財としての横浜能楽堂の魅力を活かし、地域コミュニティやMICEとも連携した各種の「施設見学会」、次世代育成を目的とした「こども狂言ワークショップ」「こども狂言堂」、芸術性が高く能・狂言の振興・発展に寄与する「東次郎 家伝十二番」、「特別公演－蠟燭能」、国内外に向けて文化芸術を発信する「大典 奉祝の芸能」などを予定通り実施しました（「東次郎 家伝十二番」は1公演中止）。</p> <p>一方で、能楽等の愛好者拡大の一環として、近隣の文化施設である神奈川県立歴史博物館と連携し、横浜ならではの魅力に溢れた公演「井伊直弼の作った能と狂言」、アクセシビリティに柔軟に対応し、障害のあるなしに関わらず能・狂言を楽しめる「バリアフリー能」などを企画していましたが、コロナウイルス感染拡大防止のため中止となりました。</p>
<p>助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。</p> <p>【文化的意義】 能・狂言をはじめとする古典芸能は、長い歴史を受け継ぐ文化財としてだけでなく、その芸術性は高く評価され、他のジャンルにも影響を与え続けています。また、文化芸術基本法前文にあるとおり、「国際化が進展する中において、自己認識の基点となり、文化的な伝統を尊重する心を育てるもの」として古典芸能は重要な位置づけにあると考えられます。一方、日本の伝統文化を感じられる機会は減少しています。情緒あふれる日本の精神性と豊かな市民生活を育むツールとして、またインバウンドの増加を契機として、日本の伝統文化を国内外に向けて発信していく拠点として、能楽堂は大きな役割を果たすことが期待されています。</p> <p>【社会的意義】 横浜能楽堂に求められる役割の柱の一つ「能楽等の継承・振興・発展に向けた次世代育成・愛好者の拡大」では、様々な層に芸術への参加機会をひらく、社会的包摂の視点が求められています。横浜能楽堂では、市内小学校に実演家を派遣する「横浜市芸術文化教育プラットフォーム」、教育現場のニーズに応えた「先生のための狂言講座」など次世代育成事業を実施しています。また「バリアフリー能」では、市内の福祉施設と連携して、ソフト面・ハード面両面でのアクセシビリティの向上を毎年行っています。平成31年度からは、地域住民向けに能楽堂をより身近に感じてもらえるよう「伝統文化一日体験オープンデー」を開催し、910名が参加。参加者が他の事業に参加するケースも見られました。市民の能楽堂への関心は高く、今後も需要が高まっていくと考えられます。</p> <p>【経済的意義】 平成31年度は、11事業のうち、中止となった2事業を除く全ての事業で収入は当初の目標を上回りました。しかし、古典芸能の上演には、多くの出演者を必要とすること、遠方に拠点のある実演家も多いことなどから、多くの経費を要します。一方で古典芸能を幅広い層に楽しんでもらう観点からも、入場料は極力抑える必要があり、入場料収入だけでは、支出分を賄うことは難しい状況です。「古典芸能の力により、市民生活を豊かにするとともに、都市ブランドの形成を通じて、都市・横浜の存在感を高める」という地域における横浜能楽堂の使命を果たしていくためにも、助成は引き続き必要不可欠であると考えます。</p>

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

【目標・指標の考え方】

目標の設定にあたっては、横浜能楽堂に求められている役割に基づき、それらの役割を果たすために必要な事項を目標と定めました。また、指標の設定にあたっては、目標を達成したと考えられる、当館で設定している最低限のライン（入場率については65%、公演満足度については5段階の3.5以上など）や近年の実績を上回っているかどうかなどを基準としています。指標の測定方法としては、来場者数、広報実績、来場者アンケートの集計結果など客観的かつ具体的に数字・内容を把握できるものを活用しました。なお、目標とそれを達成するための指標が合致しない点や、指標の目標値と実際の数値が乖離している点があったため、次年度以降修正していく方針です。

指標1 入場率 65%以上（公演事業・普及啓発事業共通）

⇒実施したすべての事業で入場率は80%以上を達成し、目標値を上回りました。

指標2 公演の満足度をアンケートにより調査。5段階評価で回答してもらい平均3.5以上

（公演事業・普及啓発事業共通）

⇒実施したすべての事業で平均満足度4.4以上を達成し、目標値を上回りました。

指標3 初めての来場者をアンケートにより調査。回答者のうち初めての来場率10%以上

（公演事業・普及啓発事業共通）

⇒実施した9事業のうち、8事業で目標値を上回りました。「東次郎 家伝十二番」については、複数の公演に連続して来場する観客が多かったため、初めての来場率が8.01%と目標値を下回りました。

指標4 対象事業の新聞、HP等の露出による広報実績。各事業2回以上（公演事業・普及啓発事業共通）

⇒11事業のうち、10事業で目標値を上回りました。「史上空前の狂言会-31人超 vs たった1人」については、人気が高く、チケットが早々に完売したこともあり、広報を控えたため目標値を達成しませんでした。

指標5 アンケートや聞き取りによるお客様の声（公演事業）

・狂言を見始めてまだ日が浅いので、12か月東次郎さんの選ばれた演目を楽しみにしています。解説や意図が書かれたちらしがありがたいです。（「東次郎 家伝十二番」第2回アンケートより）

・装束などあらずじ以外の解説があつて良かった。そういった細かい所を知って見る機会はなかなかないので、またやって欲しい。（「眠くならずに楽しめる能の名曲」アンケートより）

など、公演に対する高い評価が見て取れました。

指標5 対象事業の後援・協力団体数10団体以上（普及啓発事業）

⇒後援・協力団体数は12団体で、目標値を上回りました。

指標6 対象事業の関連団体によるチラシ配布等の広報協力回数。各2団体以上。（公演事業）

⇒対象公演は各2団体ずつの広報協力があり、目標値を達成しました。

指標6 対象事業の障がい者向けサポート利用数。次年度以降目標数設定（普及啓発事業）

⇒対象事業が中止となったため、今年度は測ることができませんでした。

指標7 対象事業のアンケートで「授業の組立に役立つ内容だった」等の回答5件以上（普及啓発事業）

⇒対象事業では7件の「授業の組立に役立つ内容だった」等の回答が見られ、目標値を上回りました。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。
アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

・事業期間について

実施した事業については、概ね当初の計画通り、事業の周知、チケットの発売、公演の実施を行うことができました。しかし、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、2月の下旬以降の事業を中止しました。中止となった公演は、以下の通りです。

- ・ 2月21日「一閑張り作り体験と横浜能楽堂見学」 ※2回のうち1回
- ・ 2月29日「井伊直弼の作った能と狂言」
- ・ 3月1日「東次郎 家伝十二番」第12回
- ・ 3月3日、10日、16日、18日「こども狂言ワークショップ卒業編」 ※10回のうち4回
- ・ 3月20日「バリアフリー能」
- ・ 3月22日「横浜こども狂言会」
- ・ 3月28日「施設見学会」

・収支について

より多くの方に公演を観ていただけるように広報活動を行い、また極力コストカットを試みた結果、実施したほぼすべての事業で、当初の予定よりも収支が改善しました。「横浜能楽堂来館促進プロジェクト」については、横浜市や市民からのニーズに応え、事業数や規模を拡大したため、当初より支出額が増えましたが、それを上回る増収がありました。中止になった事業については、入場料を購入者へ払い戻し、また発生済みの経費については支払いを行うと共に出演者には一定の公演キャンセル料を支払いましたが、それでも年度全体では当初予算よりも収支が改善しています。

・入場者数について

当初の目標である6,765人を大幅に上回る10,423人の来場・参加がありました。より多くの方に公演を観ていただけるように広報活動を行った結果ともいえますが、当初の目標を多くの公演で最低限の数値である65%に設定していたことが理由として挙げられると思います。次年度以降は公演ごとにより実態に即した数値を設定していきます。

(4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

(1) 劇場・音楽堂等を象徴する人物・鍵となる人物（キーパーソン）の存在

平成 31 年度より芸術面の責任者である芸術監督、運営責任者である支配人のポストを新設し、館の管理運営を行っています。

◆芸術監督 中村 雅之

芸術監督は、幅広い知識や海外の芸術団体とのネットワークを活かし、古典芸能の専門館として高い評価を得てきた横浜能楽堂の、芸術面での方向性を決定し、質の高い公演を提供する責任者です。本年度は、横浜能楽堂での各公演のプロデュース、講演活動の他、吉祥寺薪能など外部での解説、明治大学兼任講師、にっぽん文楽プロデューサーなどを勤め、「歌い踊る切手 古典芸能トリビア Book」（切手の博物館刊）、和菓子の芸心（東京新聞にて月 1 回連載）などの執筆活動を行いました。プロデュースした「大典 奉祝の芸能」は、新聞記事に 19 回掲載され、高い注目を集めました。また 2 度目の開催となった「眠くならずに楽しめる能の名曲」のトークも好評で、次年度以降の開催を求める声が多く聞かれました。



「眠くならずに楽しめる能の名曲」トーク



「歌い踊る切手」

(2) 創造活動に関わる建物整備など

横浜能楽堂の本舞台は明治 8 年に東京上根岸の前田齊泰邸に建てられた、現存する関東最古の能舞台で、横浜市の有形文化財にも指定されています。横浜能楽堂では本舞台を適切に維持管理しながら、能・狂言に止まらず、様々な古典芸能の公演・ワークショップ、施設見学会などを実施することで、施設の活用方法を市民に向けて提示しています。また近年は、横浜市とともに M I C E 振興にも力を入れ、ユニークベニュー会場としての需要も高まっています。

(3) 企画内容、作品の芸術性の高さ、特色について

・特別企画公演「大典 奉祝の芸能」は、新天皇の即位という慶事に際し、古典芸能の中から皇室縁の曲や祝儀曲を集め、2 日にわたり開催。両日ともにチケットは完売し、メディアからも注目を集めた公演となりました。第 1 日は、琉球舞踊を上演。出演は組踊立方の人間国宝・宮城能鳳氏や琉球舞踊の重鎮・志田房子氏をはじめ、ベテランから若手まで実力者を揃えました。横浜は鶴見区に沖縄からの移住者が多く住むなど、市民の琉球芸能への関心が高く、観客は、祝儀曲として馴染み深い「かぎやで風」から上皇陛下が琉歌の形式で詠まれた御歌を歌詞として作曲された「今帰仁の桜」「歌声の響」まで、琉球舞踊の多様な魅力を楽しみました。第 2 日は邦楽と能楽を取り上げ、大正天皇の銀婚式を祝した箏曲「五月晴」、神泉苑に舞い降りた鷺の姿を真似る狂言「鷺」、大正天皇の即位を祝して作られた能「大典」などを上演。狂言「鷺」は、鷺流のみに伝承されていた作品を、大蔵流の山本東次郎氏により復曲。本作は 10 月 20 日に観世能楽堂で開催された「山階会」で再演されています。また、能「大典」は、能楽研究者・西野春雄氏の監修により詞章・演出を見直して上演。本作は 11 月 14 日～16 日にニューヨークのジャパン・ソサエティーでも上演され、国内外から高い評価を得ました。上演見直しについての記録は西野春雄氏により、法政大学能楽研究所紀要に掲載されています。

・「次世代育成プロジェクト」では、「こども狂言堂」「先生のための狂言講座」「横浜市文化芸術教育プラットフォーム」など次代を担う子供たちに古典芸能の楽しさに親しんでもらう事業を実施。「先生のための狂言講座」では、市内の小・中学校の先生に限定して告知を行ったにも関わらず、予定者数 50 名を大幅に超える 108 人の参加がありました。人間国宝の山本東次郎氏が解説を行うことで、狂言の魅力や作品の持つ本質などをより実感を持って伝えることができ、参加者からも「『狂言』という、あまり身近ではなかったものが、話を聞き親近感をもてました。子ども達に授業を行なう時にも思いをもって話ができそうです」などの感想が聞かれました。「横浜市文化芸術教育プラットフォーム」では、市内 5 つの小学校にアーティストを派遣。今年は初めて小学校から和太鼓の授業の要望が出たため、市内にある和太鼓スクール HIBIKUS と連携し、授業を実施しました。

自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながっていた（と認められる）か。

横浜市文化観光局による「横浜の文化観光施設 イベントへの来訪実態」（平成30年）調査では、横浜能楽堂の市民による施設認知度や施設推奨率は、約60%と比較的高いと言えますが、実際の来訪率は10%を下回っており、地域住民が日頃から足を運びたくなる施設となっていないのが現状です。

【参考】横浜の文化観光施設 イベントへの来訪実態

https://www.city.yokohama.lg.jp/kanko-bunka/miryoku/data/chosa.files/0021_20190304.pdf

「横浜能楽堂来館促進プロジェクト」では、そのような古典芸能に馴染みが薄く、日頃、能楽堂に足を運ぶ機会のない層へ横浜能楽堂周知と来館促進を図る事業を実施しています。平成31年度は「施設見学会」や「伝統文化一日体験オープンデー」など9種類の催しを合計28回行いました。これまでにない取り組みとして、8月に、仕舞鑑賞、和楽器の体験、和の伝承遊びなど、能楽堂に馴染みのない方に丸1日楽しめるプログラムを提供する「伝統文化一日体験オープンデー」、10月には横浜市と共同でラグビーワールドカップの開催に併せ、海外からのプレス向けに仕舞の上演鑑賞のついた施設見学会「横浜能楽堂メディアツアー」を実施しました。各事業とも近隣施設や企業、学校、コミュニティと連携して企画、広報などを行い、地域に根差した活動を行った結果、目標の1,500人を上回る2,066人の来場者があり、アンケート回答者のうち横浜能楽堂への初めての来訪率も43.3%を占めるなど高い効果があったことが見て取れます。来場者の中には、公演鑑賞や他のワークショップに参加するケースが見られたほか、2月に開催した「おとな狂言ワークショップ」では、参加者が引き続き施設を利用して稽古を継続するといった動きもあり、取り組みが良い循環を生んでいます。ワークショップ参加者等、市民がより気軽に施設を利用していただけるよう、「応援割」や「初めての朝割」といった施設利用料金の各種減免制度も設定し、足を運びやすい施設となるような工夫も行っています。



「伝統文化一日体験オープンデー」



「横浜能楽堂メディアツアー」

8月に公益社団法人能楽協会が主催した「ESSENCE 能～バリアフリー対応～」には、「バリアフリー能」で横浜能楽堂が培ってきた、障がい者向けのサポートに関するノウハウを提供。11月から12月に横浜市が中心となり、横浜のナイトタイムエコノミー活性化を目的としたイルミネーションと先端技術を活用したイベント「NIGHT SYNC YOKOHAMA」では、仕舞上演イベントに制作協力。11月にニューヨークのジャパン・ソサエティー主催の「Taiten: Noh & Kyogen」に制作協力。2月に横浜にぎわい座で開催された「狂言と落語の会」での制作協力など、横浜能楽堂のノウハウやアイデアを活かして、市内外の催しに協力することで、古典芸能の専門館としての存在をアピールしています。



「NIGHT SYNC YOKOHAMA」

(5) 持続性

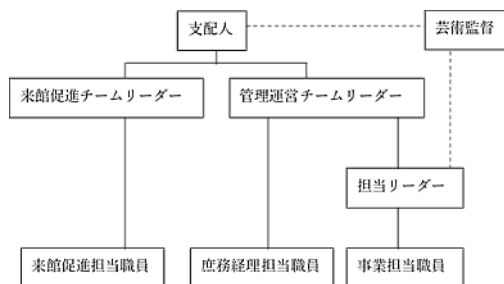
自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展した（と認められる）か。

【人材面】

平成31年度より、全国の能楽堂でも初めてとなる芸術監督のポストを新設。公演の芸術面・企画面での統括を専門的に行うことでより質の高い公演実施が可能となっています。また来館促進チームリーダーのポストも新設されたことで、来館促進を目的とした事業に力を入れられるようになり、施設見学会やワークショップ等、公演以外の能楽堂の魅力アピールする事業数が昨年度より増加しました。

公演制作は、平成31年度はプロデューサー2名を含む4名が担当。企画立案や制作を行うことで事業全体を円滑に実施しています。制作担当は横浜市芸術文化振興財団の実施する専門人材研修（平成31年度は2回実施）に参加しスキルアップを図るほか、MBO制度を用いて担当事業の目標を定め、年度末に振り返りを行うことで、今後の事業運営に活かしていくシステムが構築されています。また古典芸能の公演制作には、専門性を持つ職員の存在が不可欠です。当財団においても人事異動はありますが、プロデューサーは平均8年、他の担当職員は3年横浜能楽堂で勤務しており、安定した運営が可能となっています。また、古典芸能に関する専門知識を有する職員について本人の資質を踏まえて契約職員から一般職員に登用するなど、中長期視点に基づいた人事施策を実施しています。



横浜能楽堂組織図

【財務面】

横浜能楽の主な収益基盤は、「助成金収入」の他、「横浜市指定管理料収入」「自主事業収入（入場料収入等）」「施設利用料金収入」の3項目であり、この4項目で全体の約95%を構成します。本助成対象事業の実施に際しては中止公演を除く各公演事業において目標以上の入場料収入を確保することができましたが、これは各事業のオリジナリティーを潜在的観客層に適切に伝達することができた成果と考えています。この企画→発信→来場というサイクルのベースとなる「来館者との関係性」について、本助成対象事業の実施を通じてより強化することができたと考えています。

また、「横浜能楽堂来館促進プロジェクト」により能楽との接点がなかった市民の方たちへの施設アピールによる貸館利用率の向上、「おとな狂言ワークショップ」参加者による自主運営サークルにより練習施設の定期利用開始等、新たな貸館利用者の育成による施設利用料金収入の安定的確保にもつながっています。

【ネットワーク】

横浜能楽堂の建つ紅葉ヶ丘近辺は、神奈川県立音楽堂、神奈川県立図書館、神奈川県立青少年センター、横浜市民ギャラリーと5つの公共文化施設が集まる地域。互いの施設の管理運営についての情報交換を平成30年度より始めました。平成31年度は17回のミーティングを行ったほか、10月に「紅葉ヶ丘まいらん2019・秋」として5館連携イベントも開催。地域をより盛り上げていくため、今後も連携していく予定です。



「紅葉ヶ丘まいらん」チラシと連携イベントでの木の貯水槽見学の様子

また、横浜能楽堂は、ニューヨークで様々な日本文化を紹介するプログラムを実施し、日米の文化交流を図る非営利団体「ジャパン・ソサエティー」と、これまで2度の共同制作、制作協力を行っています。平成31年度も7月に開催した能「大典」を含むプログラムが、11月に「Taiten: Noh & Kyogen」として上演され、その制作協力を行いました。今後も連携は継続し、横浜能楽堂の企画するプログラムを海外へと発信していく予定です。